



Title	『土左日記』亡児追慕記事における象徴性：『古今集』巻第十六哀傷歌との関わりから
Author(s)	大場, 健太
Citation	国語国文研究, 151, 29-44
Issue Date	2018-06-11
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77821">http://hdl.handle.net/2115/77821</a>
Type	article
File Information	kokugo.pdf



[Instructions for use](#)

# 『土左日記』 亡児追慕記事における象徴性

——『古今集』卷第十六哀傷歌との関わりから——

大 場 健 太

はじめに

『土左日記』に見える亡児追慕の記事は全五十五日間の旅のうち六日間で繰り返される。左に、亡児追慕記事を(一)から(六)として示す。なお、歌番号は筆者が付したものである。

(一) 十二月二十七日条

かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてはかに亡せにしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何ごともいはず。京へ帰るに、女子のなきのみぞ悲しび恋ふる。ある人々もえ堪へず。このあひだに、ある人の書きて出だせる歌、

みやこへと思ふをものかなしきはかへらぬ人のあればな  
りけり (3)

また、ある時には、

あるものと忘れつつなほなき人をいづらととふぞかなしか

りける

(二) 一月十一日条

この、羽根といふところ問ふ童のついでにぞ、また、昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るる。今日はまして、母の悲しがるることは。下りし時の人の数足らねば、古歌に「数は足らでぞ帰るべらなる」といふことを思ひ出でて、人のよめる、世の中に思ひやれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな (16)

といひつつなむ。

(三) 二月四日条

この泊の浜には、くさぐさのうるわしき貝、石など多かり。かかれば、ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、船なる人のよめる、寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ (41)

といへれば、ある人の堪へずして、船の心やりによめる、

忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ

(42)

となむいへる。女子のためには、親、幼くなりぬべし。「玉ならずもありけむを」と、人いはむや。されども「死じ子、顔よかりき」といふやうもあり。

(四) 二月五日条

ここに、昔へ人の母、一日片時も忘れねばよめる、

住江に船さし寄せよ忘草しるしありやと摘みて行くべく

(47)

となむ。うつたへに忘れなむとはあらで、恋しき心地、しばしやすめて、またも恋ふる力にせむ、となるべし。

(五) 二月九日条

かく、上る人々の中に、京より下りし時に、みな人、子どもなかりき、到れりし国にてぞ、子生める者ども、ありあへる。人みな、船のとまるところに、子を抱きつつ、降り乗りす。これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

(55)

なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくて来るがかなしき

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きて、いかがあらむ。

かうやうのことも、歌も、好むとてあるにもあらざるべし。唐土も、こども、思ふことに堪へぬ時のわざとか。

(六) 二月十六日条

思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人も、

みな子たかりてののしる。かかるうちに、なほ、悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲し

さ (60)

とぞいへる。なほ、飽かずやあらむ、また、かくなむ、

見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れせましや

(61)

長谷川政春氏は、亡児追慕記事は作者による虚構であり貫之の喪失感の象徴であるとの見方を示した。

土佐日記における「幼女の死」の内実は、形式から言えば貫之の卓抜した虚構のレトリックで、彼の体得していた習性の反映であり、内容的には土佐国にあって体験し実感しなければならなかった流人意識・他者の死との邂逅・自己の死の予感などの昇華された内的世界の具現であった<sup>2)</sup>。

氏が、亡児追慕に貫之の喪失感を見て以来、亡児追慕を作者貫之の人生と関連づけて読み解く研究がなされている。貫之は土佐守在任中、「古今集」<sup>3)</sup>、「新撰和歌」の選進を命じた醍醐天皇や、庇護者である藤原兼輔など、自身にとって大切な人物を多く失っており、貫之が悲嘆に暮れたことは確かであろう。しかし、作者貫之が喪失感に包まれていたことと、作品に〈貫之〉の喪失感が描かれていることは直結できない。むしろ、亡児追慕記事がそれを越えて作者貫之の悲嘆という次元にまで還元されるような読みを誘発する、「土左日記」の作品叙述のあり方について考える必要があるのではないか。本論では、「土左日記」の亡児追慕記事が抽象的な表現であるがゆえ

に象徴性を帯びていること、およびこの抽象的な表現が亡児追慕に貫之の人生を当て嵌めるといふ読みを誘発することを指摘する。

## 一 作者貫之と作品内における〈貫之〉

まず、『土左日記』に持ち込まれる〈貫之〉がどこまで拡張可能かについて考察し、作者貫之を『土左日記』の亡児追慕記事に投影して読むことが妥当か否かを検討する。

『今昔物語集』、『古本説話集』、『宇治拾遺物語』には、『土左日記』十二月二十七日条、かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてはかに亡せにしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何ごともいはず。京へ帰るに、女子のなきのみぞ悲しび恋ふる。ある人々もえ堪へず。このあひだに、ある人の書きて出だせる歌、

みやこへと思ふをもののかなしきはかへらぬ人のあればな  
りけり (3)

また、ある時には、  
あるものと忘れつつなほなき人をいづらととふぞかなしかりける (4)

をもとにしたと考えられる説話が見られ、これらにおいて、「女子」は貫之の子として明示される。

また、『新大系』、『新全集』、『おうふう』という新しい注釈書を除く諸注は、「女子」を貫之夫妻の子と理解してきた。この解釈は、『土左日記』が日記文学であるというジャンル意識によって生み出され

たと考えられる。『土左日記』は貫之作の日記であるから、日記の記述は作者貫之の自己の体験に基づくものであって、作中において繰り返し登場する亡児は、貫之の子と明示されずとも言うまでもなく貫之の子であるというような理解がなされてきたのであろう。しかし、作品内には、女子を貫之の子と確認づける根拠は皆無である。そもそも、十二月二十七日条で亡児追慕歌を詠んだのは「ある人」であり、この「ある人」という人物の呼称についてもみておく必要がある。「ある人」の初出である十二月二十一日条の記事を次に引用する。

ある人、県の四年五年果てて、例のことども皆し終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべきところへわたる。ここで登場する「ある人」は「県の四年五年果てて」や「解由など取りて」という表現から、前国司であると特定できる。そして、この前国司という情報から読者は「ある人」を〈貫之〉と比定する。しかし、このように「ある人」≡前国司≡〈貫之〉と結びつけられる例はこの他にはない。『土左日記』の「ある人」という呼称について東原伸明氏は「おうふう」の「解説」で次のように述べる。

「ある人」という呼称は、『土左日記』の用例に当たってみると歌壇の重鎮であった人物を臚化しているだけではなくて、「紀貫之」とはまったく正反対の性格の人物、驚くほど和歌が下手な人物にも、同様に「ある人」という呼称が用いられているのである。だから「紀貫之」を指示する「ある人」と、そのようではない「ある人」との区別がつかない。したがって「ある人」という呼称は、特定の統一的な人物の映像(イメージ)を、読

者に結ばせない機能を有しているといえる。

「ある人」という語は、作品中に二十五回出てくるが、初出の一例をのぞいては、ある人＝前国司＝貫之と特定できる例はない。一方、作品中で「貫之」の名は登場しないものの、「貫之」と推定される人物として、「前の守」、「船の長しける翁」、「船君の病者」、「船君なる人」、「心ち悩む船君」が登場する。この二人はあたかも別人であるかのように描かれるが、前の国守と一行の長という情報から読者は「貫之」を想起し、同一人物として認知できる。「前の守」、「船の長しける翁」という表現は「貫之」の船晦表現ではありながらも、「貫之」であることを推定できる表現である。

亡児追慕者は、「前の守」や「船の長しける翁」といった「貫之」を想定させる人物ではなく「ある人」や「昔へ人の母」である。すなわち、亡児追慕記事は、「貫之」と推定可能な人物と無縁のものであるかのように語られているのであり、「女子」を「貫之」の子とみなすべきではないのである。

## 二 亡児像

次に、亡児像について見ていく。亡児追慕記事の初出である（前掲）十二月二十七日条には、「かくあるうちに、京にて生れたりし女子、国にてはかに亡せにしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何ごともいはず。」という一文があり、①京で生まれたこと、②ここ（＝土佐国）で亡くなったこと、③女児であること、という亡児に関する三つの情報が語られる。そして、以後の亡児追慕記

事においても、この三つの情報が繰り返し語られるのみである。また、これら三つの情報は、亡児追慕歌の詠出事情と密接に関連している。

①と②つまり、「女子」が京で生まれて、「土佐国」で死んだことは十二月二十七日条3番歌、および作品で繰り返される望京の念と結びつく。亡児追慕と帰京の旅との関連については既に先行研究において指摘がある通りである。長谷川氏は次のように述べる。

都と鄙の対比構造は、そのまま「都で誕生した幼女」と「鄙で死亡した幼女」に対応し、貫之の精神構造から捉え直せば、都が「生」、鄙が「死」を象徴する。だから、都から鄙への旅は喪失の時間であり、鄙から都への旅はその失われた（時）を求めての旅であったと言えるのではないか。回想は希求行為のひとつである。

また、土方洋一氏も同様の指摘を行っている。

その舟旅は、一行の中心人物たる前国司が公的立場を帯びない裸形の個人として存在する五十五日間であると同時に、往路においては傍らにあった幼児が復路においてはどこにもいないという喪失感を確認し続ける旅でもあった。このように、亡児追懐は都へ帰る旅の記録という『土左日記』の記述の枠組みと一対のものなのであり、それゆえに、帰京の後もこの親は幼児を失ったことを嘆き続けたことであろうというような想像を殆ど喚起しないのである。亡児追懐の記述が、この日記の表現構造の上で象徴的な意味を担っていることは疑いない。

残る③の情報は、二月四日条41番歌と結びつく。二月四日条には

次のようにあった。

この泊の浜には、くさぐさのうるわしき貝、石など多かり。かかれば、ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、船なる人のよめる、寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ

(41)

貝を用いた遊びは、特に女の子の間で楽しまれたものであると考えられる。『堤中納言物語』「貝合」には「この姫君と上との御方の姫君と、貝合せさせたまはむとて、月ごろ、いみじく集めさせたまふに」とあり、平安時代の少女が貝合わせのために貝を熱心に収集していたことがうかがえる。『土左日記』二月四日条における、泊の浜の貝石の描写は、ただ亡児追慕の情を呼び起こすにとどまらず、『忘れ貝』を想起させ、これを詠み込んだ亡児追慕歌へと繋がっている。貝石の描写は二月四日条亡児追慕記事の構想上必須のものである。この描写が亡児追慕と結びつくのは亡児が女兒であつてのことである。

このように、亡児に関する情報は亡児追慕歌の詠出に関連する点のみが示されている。亡児がどのような人物であったか、生前の姿やエピソードは描かれていないのである。

### 三 亡児追慕者像

今度は、亡児追慕者がどのように描かれているのか見ていく。

亡児追慕者として最も明確に描かれているのは、亡児の「母」であるとされる。例えば、土方氏は亡児追慕歌について、「詠歌主体

がはじめのうちは不明確だが、次第に死んだ子の母親という具体的な主体へと引き絞られていく感がある。」と述べる。しかし、六日間の亡児追慕記事のうち、詠み手が「母」であることが明記される亡児追慕歌は、二月五日条47番歌と二月九日条55番歌のわずか二首のみである。末尾の二月十六日条には「母」の名は作品の表面に浮上しておらず、次第に主体が「引き絞られていく」とは言い難い。また、亡児の「母」と明示されていないが、諸注は、二月四日条の「船なる人」を「母」と推定している。

この泊の浜には、くさぐさのうるわしき貝、石など多かり。かかれば、ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、船なる人のよめる、寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ

(41)

『全注釈』は、この二月四日条「船なる人」に注して、次のように述べている。

もつとも、二月五日条に忘れ草の歌を詠んだのが、作中の人格としては、貫之妻となつていから、ここでも、忘れ貝を拾つて、追憶の苦しさから逃れたいと願う歌を詠んだのは、貫之妻ということになるが、実はこれも、貫之の分身と考えられる。『全注釈』の言及する『土左日記』二月五日条を次にあげておく。ここに、昔へ人の母、一日片時も忘れねばよめる、

住江に船さし寄せよ忘草しるしありやと摘みて行くべく

(47)

『土佐日記燈』、『土左日記創見』、『土佐日記解』、『土佐日記舟の直路』、『学生鑑賞』、『全注釈』、『角川文庫』、『旺文社文庫』、『旧全集』、

『新大系』といった多数の注が二月四日条の「船なる人」（41番歌の詠み手）を亡児の「母」と推定する。しかし、翌日の二月五日条において、同様の発想の亡児追慕歌を「昔へ人の母」が詠んでいることから遡って考えなければ、この「船なる人」が亡児の母であるとは推定し得ない。むしろ、ここで問題にしなければならぬのは、なぜこの歌の詠み手が「母」ではなく「船なる人」であるかという点である。亡児追慕者の中心は「母」であるが、歌の詠み手を「母」と言ったり、「船なる人」と言ったり、異なる呼称を用いている。このような呼称の違いは何を意味するのか。この問題点を考える上で有益な先行研究は、秋本守英氏による、『土左日記』の文章の特徴についての考察である。秋本氏は次のように述べる。

叙述の順序とは逆に和歌から地の文をみれば、和歌を構成する事柄の一つ一つは、地の文において、場面に応じた肉づけが施されているとはいふものの、その肉づけが和歌を超えることは遂がない。地の文は、和歌の素材を外面的に解説するにとどまって、そのさまや内面的真理を描こうとはしない。

「地の文は、和歌の素材を外面的に解説するにとどま」という秋山氏の見解は亡児追慕歌の詠み手の呼称についても、応用できるのではない。そこで、『土左日記』亡児追慕記事において、和歌の内容にに応じて詠み人の呼称が使い分けられていることを以下で例証していく。

【例一】二月四日条「船なる人」

この泊の浜には、くさぐさのうるわしき貝、石など多かり。かかれば、ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、船なる人のよめる、

寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ

(41)

41番歌の詠み手は「船なる人」である。「降りて拾う」という内容の歌を詠むのは船に乗っている人、つまり「船なる人」でなければならぬ。歌の内容が人物の呼称を要請しているのである。

【例二】二月五日条「昔へ人の母」

また、住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人のよめる歌、

今見てぞ身をば知りぬる住江の松より先にわれは経にけり

(46)

ここに、昔へ人の母、一日片時も忘れねばよめる、

住江に船さし寄せよ忘草しるしありやと摘みて行くべく

(47)

となむ。うつたへに忘れなむとはあらで、恋しき心地、しば

しやすめて、またも恋ふる力にせむ、となるべし。

住吉近辺を航行している折に、二首の歌が詠まれる。一首目は住吉の松を詠んだもので、これは亡児追慕歌ではない。二首目は住吉の忘れ草を詠んだもので、こちらは亡児追慕歌である。46番歌の詠み手は、住吉という地名から松を連想して歌を詠んだが、続く47番歌では、松ではなく忘れ草を連想している。松ではなく、忘れ草を連想するのは、子を失った悲しみを一日たりとも忘れえぬ亡児の母こそがふさわしい。住吉という地名から松ではなく、忘れ草を想起するこの歌の詠み手は亡児追慕の当事者である母親を描いて他にないのである。

【例三】二月九日条「昔の子の母」

かく、上る人々の中に、京より下りし時に、みな人、子どもなかりき、到れりし国にてぞ、子生める者ども、ありあへる。人みな、船のとまるところに、子を抱きつつ、降り乘りす。これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくて来るがかなしき  
(55)

といひてぞ泣きける。

55番歌は、亡児の母と船人とを対比的にとらえ、自身の悲嘆の情を表出する歌である。この歌の詠み手は、亡児の母でなくては成立しない。また、二月五日条で「昔へ人の母」であったのが、二月九日条で「昔の子の母」とあるのは、「子」という語が頻出しているのと関連があるだろう。

【例四】十二月二十七日条「ある人」

かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてにはかに亡せにしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何ごともいはず。京へ帰るに、女子のなきのみぞ悲しび恋ふる。ある人々もえ堪へず。このあひだに、ある人の書きて出だせる歌、

みやこへと思ふをもののかなしきはかへらぬ人のあれはな  
りけり  
(3)

また、ある時には、

あるものと忘れつつなほなき人をいづらととふぞかなしかりける  
(4)

十二月二十七日条では、「ある人」が亡児追慕歌を「書きて出だ」

している。「ある人」は船中の誰をもさしうる語で、本文中の語を用いて言うならば「ある人々」のうちの誰かであろう。亡児追慕の件は、当事者の「母」だけではなく、一行にも共有されている。これは、亡児の「母」が特異な存在として描かれる二月九日条とは対照的である。「みやこへと思ふもののかなしきはかへらぬ人のあれはなりけり」という亡児追慕歌は、一見すると亡児追慕の当事者たる両親による悲哀の直叙のようであるが、歌が詠まれた状況を踏まえると、両親の周辺人物である「ある人」が、両親の悲哀の情を推察して客観的に状況を分析した歌とも捉えることができる。

以上を総括すると、和歌の内容に応じて詠み人が記される傾向が見られるといえよう。すなわち、周囲の人間と異なる境遇から亡児を追慕する場合のみ、「母」という存在が示され、一方、当事者ではなく共感者として亡児追慕歌を詠む場合には「ある人」が用いられているのではなからうか。

なお、本作品においては、亡児の「母」や「ある人」だけではなく、記者もまた亡児追慕の情を表明している。記者は亡児追慕者を傍で見ながらそのありさまを説明してきたが、記述態度は必ずしも中立的なものではなく、多分に共感的な姿勢を見せている。一月十一日条の「また、昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るる。」はまさに記者による同情である。また、二月四日条では、船なる人の歌とある人の歌をうけて、記者は「女子のためには、親、幼くなりぬべし」とその両親の心を推し量る。続く場面では、両親に対して共感的な物言いをする。玉というほどの子でもないだろうにという人々の批判を予測し、「死じ子顔よかりき」と、両親を共感的に弁護



している。二月五日条では「昔へ人の母」の心情を、二月九日条では「父もこれを聞きて、いかがあらむ」と父親の心をそれぞれ推察している。二月十六日条の「この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき」は、母親への同情が強まった結果の言辭であろう。このように記者は女子の両親（特に母親）に対して同情しているのであり、決して傍観者として客観的に事実を書くこととしていたのではない。記者の視線は一貫して女子の母に注がれている。記者は女子の死を直視してはならず、女子を失った母親を見ているのである。作品内に綴られる記者の悲嘆は、女子の両親（特に母親）に対する共感によるものであり、記者が独自の立場で亡児を追慕しているのではない。

『土左日記』の亡児追慕記事は、女子の母が娘を追慕する様子を記者が同情しながら眺めて書きとどめるという形式をとっており、亡児追慕の主体は単一の人物に帰着できないのである。このように、亡児追慕者の人物像は不明確であり、亡児追慕の中心人物である「母」の人物像を掘り下げていこうとはしていないのだ。

#### 四 亡児像と亡児追慕者像

ここまで確認してきた亡児像と亡児追慕者像について共通して言えるのは、両者とも亡児追慕歌の内容に関わる最低限度の記述にとどまっているという点である。亡児追慕歌は亡児の死という事件を描くものではなく、亡児の死をいかに受けとめるかを表現するものである。結局のところ、作者の興味は女子の生前の姿にはなく、

女子を失った悲しみがいかに大きいかという悲嘆の情の描出にあつたといえよう。作品末尾に至っては亡児追慕という設定は後退し、悲嘆の情のみが前面に押し出される。女子の姿は固有の姿を持っておらず、一般化された人物と見なすことができる。一般化された亡児に貫之とつながりの深かった藤原兼輔など歴史上の人物を代入することで、亡児追慕を作者貫之の喪失体験のメタファーとする読みが成立するゆえんである。しかし、これは貫之の喪失感を暗示することが主たる目的ではなく、より普遍的な悲嘆の情を形成せんがためであつたとみるべきだろう。実人生における貫之の悲嘆は一般化された悲嘆の情の一つであつて全てではない。

従来、多くの研究者は、亡児追慕を真実味あふれるものとみなしていたが、野中春水氏は、『新釈』の「解題」において亡児像が具体性に欠けている点をはやくから指摘している。

いづれの場合にも見られる亡児追慕の情ではあるが、ただししみがある。読者は作者に同情の涙を送ろうとするのであるけれど、いったいどんな子なのか、どのように死んだのか、そうした裏づけがないばかりに、ただ貫之夫妻の心情を推しはかるばかりで、読者には心底をゆさぶるような悲痛感がわきあがってこないきらいがある。

亡児の鎮魂を願つたり、亡児の生前の姿を思い出して叙述したりするなど、亡児の姿を作品に書きとどめる術はいくらでもある。野中氏は、具体性を欠く亡児像を作品の欠点ととらえるが、むしろ、亡児および亡児追慕者の人物像をつとめて描かないようにするの

は、作者の戦略によるものと考えるべきではないか。次節および次々節では、このような哀傷の表現の特徴を『古今集』哀傷歌を手がかりに探っていく。

## 五 『土左日記』亡児追慕歌と『古今和歌集』哀傷歌

仮に、『土左日記』の亡児追慕歌を、勅撰集の部立として分類するのならば、哀傷歌の巻となるだろう。『古今集』の編者であった作者貫之は、亡児追慕記事を書くにあたって、『古今集』哀傷歌を念頭においていたと考えられるのである。そこで、本節および次節では『土左日記』亡児追慕歌と『古今集』哀傷歌の比較を行う。

『土左日記』亡児追慕歌と『古今集』哀傷歌の最大の共通点は、その表現が生者の悲嘆の情の表出に主眼が置かれている点にある。『土左日記』亡児追慕歌がそのような性格を持つものであることについては第四節で述べた通りであるが、『古今集』哀傷歌が生者中心であることについては菊地靖彦氏が次のように指摘している。

哀傷歌のかかりの部分は、人の死そのものを悼むというよりは、人の死という現象によって誘発され、喚起された、我身にまつわる感懐の表現というかたちをとる。喪失を激烈に悲しむのではなくて、人の死もまたおのれを含む一般現象の中に溶かし込まれて、静かな哀調を帯びた詠嘆となるのである。死という、これ以上ない激烈なことさえ、観念的、思想的なるものの中に融解して、一般的表現と化してしまう。それが哀傷歌であった。死は歌人の認識する世界をもう一つ拡大する契機なのである。

そもそも、哀傷歌は人の死を事実として記録していくという性質のものではなく、その死にまつわる抒情の表出に主眼を置いたものであるから、死者の姿が明確に記されないのは当然のことである。しかしその抒情においても、『古今集』哀傷歌で表現されるのは、菊地氏が「我身にまつわる感懐の表現」と言うように詠み手の悲しみやその死を通して感じた世の無常ばかりであり、死者を直視する歌は一首も見られない。

哀傷歌はその存立基盤である個々の死との結びつきが極めて脆弱であり、歌だけを見ると誰の死を対象としたものであるかが不明であるという事態に陥りかねない。まさに、菊地氏が「哀傷歌は仮に詞書を相互に交換しあってもいっこうに不都合ではない。」と述べる通りである。菊地氏は、さらに「詞書さえ巧みに取り繕えば、たとえ本来は死に関わる歌でなくとも、それとして仕立て得る」ことを次に掲げる。『古今集』836番歌を例に挙げて説明する。

あねの身まかりにける時によめる

せをせばふちとなりてもよどみけりわかれをとむるしがらみぞなき  
(『古今集』836番歌)

これと全く同じ歌が『忠岑集』に収められており(174番歌)、『古今集』の詞書が「あねの身まかりにける時によめる」とあるのに対し、『忠岑集』の詞書は「あひしりたる人の、すまひのつかひに、いととほざとところにくだるとて」となっている。菊地氏は、問題となつてゐる歌が『古今集』の編者の一人忠岑自身の歌であることを重視し、もとの離別歌を哀傷歌として組み替えたものと指摘している。ここで問題にしたいのは、『古今集』836番歌の成立事情ではなく、同歌が

離別歌とも解釈できるほど、死そのものとの関係が薄いという点である。このような、死そのものとの結びつき弱い哀傷歌は他にも見られ、例えば、越後春子氏は、849番歌「神な月時雨にぬるるもみぢばはただわび人のたもとなりけり」を「詞書なくして歌のみで鑑賞した場合」に「その悲哀の原因を必ずしも「人の死」に求める必要のない歌」であると指摘している。

このように、『古今集』巻第十六哀傷歌の部には、詞書が無ければ哀傷歌として成り立たない歌が見られる。哀傷歌における人の死は歌の媒介にすぎず、哀傷歌は個々の死を離れてより普遍化された悲しみや無常観の表現を指向しているのである。これは言い換えれば詞書がその歌を哀傷歌たらしめる効果を發揮しているということである。まさに、菊地氏が「こうした一般的な、観念的な表現をほかならぬ死につなぎとめているのは、わずかに詞書によってであるにすぎない。」と述べる通りである。そして、この『古今集』における「哀傷歌」と「詞書」の関係は、『土左日記』における「亡児追慕歌」と「地の文」との関係に類似している。

『土左日記』の亡児追慕歌九首の中にも、歌だけを取り出すと「女子」の死とは関係の無い歌となりうるものが見られる。例えば、41番歌「寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ」である。この歌を亡児追慕歌でなく恋歌であるとする見解が山口昌男氏によって提出されている。文脈から判断すれば「昔の人」が「女子」を指していることは明らかであり、山口氏の説は退けられるべきものである。しかし、『土左日記』41番歌だけを取り出して単独で鑑賞すると、「忘れ貝」が『万葉集』の相聞歌に多く詠み込まれてい

ることに鑑みてこれを恋の歌と解するのがむしろ自然である。また、『土左日記』16番歌「世の中に思ひやれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな」についても、その歌を単独で取り出せば子を思う普遍的な「親心」を歌ったものであると解するほかない。これらの歌は、『土左日記』という具体的場面の中に埋め込まれて初めて亡児追慕歌たりえるのである。

## 六 理知的な哀傷歌

次に、『土左日記』亡児追慕歌と『古今集』哀傷歌の表現技巧に類似性が見られるかどうか分析する。なおここでは、『古今集』歌の表現の特徴を、技巧的、理知的な作風と定義して論を進めていくこととする。『古今集』の特徴である理知的作風が顕著に表れているのは、哀傷歌の中では貫之詠の849番歌である。次に挙げる。

藤原たかつねの朝臣の身まかりての又のとしの夏、ほととぎすの

なきけるをききてよめる つらゆき

郭公けさなくこゑにおどろけば君を別れし時にぞありける

(『古今集』849番歌)

詞書によればこの歌はホトトギスの声を聞いて詠まれたとのことである。久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)によると、ホトトギスは「死出の田長」の異名をもち、死出の山との間を往復する鳥、勸農の鳥などの伝承があり、「この世にて語らひおかんほととぎす死出の山路のしるべともなれ」(山歌

集・七五〇・待賢門院堀河)などと詠まれ、冥界と関連付けて詠まれることもある。<sup>11)</sup>この歌の詠み手は、ホトトギスが鳴いたのを聞いて、ホトトギスが冥界に通う鳥であることを連想し、冥界に通うといえ、昨年高経が亡くなったのだというような思考回路を経ている。この歌は歌語の知識に基づいて詠まれたものであり、貫之歌の特徴である観念性がよく表れている。

ところで、渡辺秀夫氏は『土左日記』には「(詠む)歌と(言ふ)歌とが、共存、というよりは位相的に混在している」と、「古今的表現の正格を有する歌(そのような意味における秀歌)の提示には(詠む)が用いられ、そうではない直叙性の強い実情歌には(言ふ)歌が用いられていることが、大局的にはほ言え、(言ふ)歌が(詠む)歌を「侵食してゆく趨勢がみられる」と指摘する。<sup>12)</sup>なお、『土左日記』の歌が『古今集』と異なり、直叙性が強いという見方は小西甚一氏の『評解』の「解説」においても示されている。

渡辺氏の分類によると、亡児追慕歌九首のうち、(詠む)歌とされるのが、16・41・42・47番歌の四首である。確かに、先に挙げた『古今集』89番歌のように、対象の死とは直接関係のない歌語の知識に基づいて詠まれた歌がこれらの(詠む)歌の中には見られる。47番歌「住江に船さし寄せよ忘草しるしありやと摘みて行くべく」は、地の文によると「昔へ人の母」が「一日片時も忘れ」られずに詠まれたことになっていて、が、作歌事情はそう単純なものではない。ここが住吉という歌枕であることを踏まえて住吉の景物である忘れ草を詠み込むという意識が根底に働いているのである。住吉と忘れ草を同時に詠み込んだ歌は、次に示すように『貫之集』にも見られる。

うちののびいざすみのえに忘れ草忘れし人の又やつまぬと

(『貫之集』 7番歌)

住のえのあさみつ塩にみそぎして恋忘れ草つみてかへらん

(『貫之集』 37番歌)

『貫之集』37番歌に見られるような、忘れ草を摘んで恋の辛さを軽減させたいという発想の歌は他の歌人たちの作にも見られ、すでに類型表現となっていたようである。この恋の歌の類型表現を亡児追慕という具体的文脈に嵌めこんだ点にこそ、『土左日記』47番歌の特徴があるといえよう。47番歌の根底にあるのは「昔へ人の母」の悲しみではなく、「住吉」、「忘れ草」をどう詠み込むかという作歌上の工夫であり、その点で、極めて理知的な歌であるといえる。

こうした特徴は、41番歌「寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ」、42番歌「忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ」においても見られる。これら二首には、「忘れ貝」が詠み込まれている。『万葉集』においては、「恋忘れ貝」と詠まれ、忘れ貝を拾って忘れようという発想の歌が多く見られる。中西進氏は、貫之が「意図的」に万葉歌を利用して歌を詠む手法をとることを指摘している。<sup>13)</sup>氏の指摘を踏まえると、『土左日記』41番歌、42番歌は『万葉集』の類型表現を念頭に置いたものと考えられる。また、西山秀人氏は41番歌が『万葉集』964番歌「わがせこにこふればくるしいとまあらばひりひてゆかむこひわすれがひ」を念頭に置いたものである可能性を指摘している。<sup>14)</sup>41番歌は、「うるわしき貝、石」が多かったので「船なる人」が「昔の人」を「恋ひ」て詠まれた歌であると地の文は伝えている。確かに「船なる人」

が「昔の人」を思い出したのはその通りであろう。しかし実際は、貝が沢山あるのを見て、貝から忘れ貝を想起し、忘れ貝を拾って忘れるという『万葉集』における恋の歌の定型表現、あるいは『万葉集』964番歌を「昔の人」を追慕するのに応用するという思考上の操作が加えられている。これは、渡辺氏が「忘れ貝」という景物（美的形式）の名（鏤型）に仮託することで、私的感情から切り離されてことばの世界にところが対象化されている」と指摘している通りである。41番歌、42番歌、（47番歌）は伝統的な詠み方を踏まえて詠まれたという点で観念的であり、直接的な感情の発露によるものではない。（詠む）歌が古今的表現であるという渡辺氏の判断は妥当であろう。

では、〈言ふ〉歌が直叙的であるという指摘は妥当だろうか。渡辺氏は、〈言ふ〉歌である亡児追慕歌五首（3・4・55・60・61番歌）について、「いずれもが「悲し」という概念語によって、しかも述語的に、心情を表白しているという単一性」が見られ、「直情性の強い」歌であるとする。これら五首に「悲し」という語が用いられているのは確かだが、はたして直叙的であると言えるのか。亡児追慕歌には、〈詠む〉歌だけではなく〈言ふ〉歌にも多くの技巧が用いられている。4番歌では、「あるもの」と「なきひと」の対比が行われている。55番歌は、「なし」と「あり」という語を複数使い、自分（「昔の子の母」と「人」とを二項対立でとらえるという技巧が用いられている。このように、4番歌および55番歌では対義語を一首の中にもりこむという言葉遊びが見られ、修辞面において技巧が認められるのである。また、これらの〈言ふ〉歌の中には、「女子」の死を他

者の生との二項対立によって把握するという、おおよそ直情性とは相反する特徴が見られる。55番歌においては「女子」の死が「人の子」の生との比較において把握されている。同様に60番歌においては「女子」の死が「小松」の寿命と比較されており、61番歌では「女子」が「松」に重ねられている。〈言ふ〉歌は「悲し」という語を用いて、「女子」の死そのものを詠み込んでいる分〈詠む〉歌と比すれば幾分か直情性があるように装っているが、実態としては〈詠む〉歌と同様の観念的な歌であると言える。

渡辺氏は、「直叙性の強い実情歌には〈言ふ〉歌が用いられて」おり、「〈言ふ〉歌」が〈詠む〉歌を「侵食してゆく趨勢がみられる」と指摘しているが、先に検証した通り、『土左日記』の亡児追慕歌は、〈詠む〉歌も〈言ふ〉歌も共通して類型表現や技巧が多く用いられており、歌そのものは『古今集』的であるといえる。しかし、亡児追慕歌が理知的な作風である一方で、『土左日記』の地の文は亡児追慕歌の作歌事情を感情によるものとして規定する傾向も見られる。

二月四日条の「船なる人」が詠んだ歌は「昔へ人の母」が詠んだ歌は「一日片時も忘れ」ることができず詠まれたものであり、二月九日条と二月十六日条の亡児追慕歌とともに「悲しきに堪へずして」詠まれたものであるとされているように、亡児追慕歌は恋しさや悲しさといった感情が高まった時に詠まれるものであるとされている。このような感情の高まりが作歌の契機であるとする思想は、二月九日条に「かうやうのことも、歌も、好むとてあるにもあらざるべし。唐土も、こころも、思ふことに堪へぬ時のわざとか。」と直接的に記され

ている。

二月五日条では亡児追慕歌の直後に「うつたへに忘れなむとはあらで、恋しき心地、しばしやすめて、またも恋ふる力にせむ、となるべし。」という言葉が添えられ、歌に詠み込まれた感情に焦点があてられている。一見すると、記者が母親への同情を示したものに過ぎないようであるが、同時に47番歌に詠まれた「忘草」を拾いに行きたいという心とはどのようなものであるかを解説する役割を果たしている。この説明により、亡児追慕の心に具体性が付与されている。二月四日条においても二月五日条と同様の手法がとられている。「女子のためには」以下の記者の言葉は、亡児追慕歌に詠み込まれた心が具体的にはどのようなものであるかを、さまざまな視点からとらえて説明するものであり歌に現実味を付加している。このように地の文は、亡児追慕歌に実感を与えているのである。技巧をこらして作られた亡児追慕歌は、地の文によつて、堪え切れない悲しみの発露として詠まれた歌であると位置づけられているのである。ここまでの分析をまとめると、亡児追慕歌は感情的なものとして規定されつつも歌そのものは理知的な作風であるといえる。この点をどのように理解するべきであろうか。

『古今集』においては歌そのものの基盤を感情表現として規定すること、歌そのものが理知的、知巧的であることが共存している。『古今集』は決して技巧そのものを重んじたものではなく、その根底にある「こころ」を表現するものであることは増田繁夫氏によつて、古今集の歌としては、対比による認識といふ理性的な面よりも、感情とか情緒とかいつた感性的なものを志向してゐるやうに思

はれる。ただ、対比といふ方法、及び対比される物事が論理的概念的な性格が強いものであるために、外形的には理知的な姿に見えることが多いけれども、古今集が表現しようしてゐるのは必ずしも理知的な次元のものではない。概念や論理はいはば歌の素材なのであつて、概念や論理についての詠嘆といふ感性的なものこそが古今集の表現しようとしたものであつたと思はれるのである。<sup>15</sup>

同じく小町谷照彦氏によつて、

『古今集』の世界は、決して単なる言語遊戯の場ではない。奇抜な発想や技巧的な表現の端々に、貫之の思弁的な横顔が見え隠れしているようである。その顔は、あるいは苦渋と諦念に満ちたものかも知れない。貫之は、和歌を媒介として、言語による表現の可能性を極限まで追求していったと言つてよい。『古今集』の成立は和歌の表現性の確立をもたらしたが、それを実現した中心的な存在が貫之であつた。『古今集』によつて、和歌の発想や表現が類型として規範化され、抒情の共有とも言うべき、共通語的な性格を帯びた安定した言語空間が成立した。印象や情感を先立てた和歌の直感的感性的な特性は、心情や思考の複雑多岐な内容を醜化し多層化して、密度の濃い表現伝達を可能にしたのである。<sup>16</sup>

と指摘されている。『古今集』において目指されたのは技巧の誇示ではなく、技巧を通して作りあげられた、より洗練されより一般化された詠み手の感情や思想の表出である。それは、「哀傷歌」においては、悲嘆の情や世の無常を詠みあげることであつた。このことを

踏まえた上で、『土左日記』の地の文が伝える作歌事情に注目したい。地の文は、亡児追慕歌が感情表現であることを繰り返している。地の文は、歌の解説を試みるのだが、その解説は歌の技巧ではなく、歌が表現している悲嘆の情とはどのようなものであるかという点に傾いている。その解説はあくまでも歌に詠まれた悲嘆の情に対してであって、歌の根底にあるはずである「女子」やその死に関して何ら明らかにしようとはしないものである。よって、いくらその悲嘆の心を解説しようと、その歌のもつ普遍性を損なうものではない。むしろ、普遍的表現であるがゆえに欠如しがちである歌に実感を補うことに寄与するのみである。

『土左日記』の亡児追慕歌を、『古今集』哀傷歌の延長線上にとらえると、その意図するところは、「女子」の死という個別の事件をより一般化し普遍的な喪失感として表現する点にあるといえるだろう。「女子」の死を一般化し抽象的に表現することで、亡児追慕という前提は後景に退き、悲嘆の情という情調が前面に進出する。仮に、亡児追慕記事において「女子」の死の場面が明確に描かれ、「女子」の死という事件が記事の中心となっていたならば、読者が亡児追慕に兼輔追慕を重ねて読むことは困難であつただろう。

## おわりに

『土左日記』の亡児追慕記事は、亡児および亡児追慕者についての叙述は乏しく人物像が不明確である一方、亡児追慕者の悲嘆の情の表出が和歌の詠出を伴い繰り返される点が特徴的である。亡児追慕

記事は、「女子」の死という一つの出来事を評述するという具体的な表現ではなく、人の死を悲しむ心情の有様の抽象的な表現であるがゆえに、象徴性を帯びている。このような哀傷の在り方は、『古今集』哀傷歌にも共通して見られるものであり、人が死に至る場面ではなく、その死をどのように受けとめるかを、和歌を中心に表現するという『土左日記』の亡児追慕記事の手法は、作者貫之が選ばれた哀傷の表現であつたといえよう。

長谷川氏が、亡児追慕に貫之の喪失感を見て以来、亡児追慕を作者貫之の人生と関連づけて読み解く研究がなされている。『土左日記』執筆時の貫之が悲嘆に暮れていたことは確かであり、そういった貫之の心情が亡児追慕を作品内に展開する一契機となつた可能性は否定できない。また『土左日記』における亡児追慕が一種の象徴性を帯びていることは先述の通りである。しかし、亡児追慕に貫之の人生を当て嵌めるといふ『土左日記』の読み方は、本作品に〈貫之〉の名が登場しないことを無視するものであり、作品世界から直接的に〈貫之〉の悲嘆を読むことは出来ないのである。『土左日記』の亡児追慕記事の象徴性は作者貫之の喪失感を暗示することが主たる目的ではなく、より普遍的な悲嘆の情を形成せんがためであるというのが本稿の立場である。実人生における貫之の悲嘆は一般化された悲嘆の情の中の一つであつて全てではない。『土左日記』の亡児追慕はより普遍的な悲嘆の表現を指向している。

注

- 1 『土左日記』本文および和歌の引用は、『新編日本古典文学全集』による。『堤中納言物語』本文の引用は、『新日本古典文学大系』による。『土左日記』以外の和歌の引用および歌番号は、『新編国歌大観 DVD-ROM』による。
- 2 長谷川政春『紀貫之論』(有精堂出版、一九八四年)第五章「土左日記へのアプローチ」(一九六九年一月初出)。以下、長谷川氏の説は同論による。
- 3 福田益和「土左日記管見——いわゆる亡児哀傷歌について——」(『長崎大学教養部紀要 人文科学』十五卷、一九七五年一月)、荒木孝子「土左日記」の基層——兼輔関係歌からの視座——」(『研究と資料』二十八輯、一九九二年十二月)など。
- 4 『今昔物語集』四十三段、『古本説話集』十三段、『宇治拾遺物語』四十一段には、『土左日記』十二月二十七日条をもとにしたと考えられる説話が見られる。
- 5 本論文において名前を挙げた『土左日記』の注釈書の略称は以下の通りである。  
 富士谷御杖『土左日記燈』(『土左日記燈』国光社/一八一七年成立) ↓ 『土左日記燈』/香川景樹『土左日記創見』(『日本文学古註大成 土左日記古註大成』国文学著刊行会、一九三四年/一八二三年成立) ↓ 『土左日記創見』/田中大秀『土左日記解』(『日本文学古註大成 土左日記古註大成』国文学著刊行会、一九三四年/一八二九年成立) ↓ 『土左日記解』/橘守部『土左日記舟の直路』(『日本文学古註大成 土左日記古註大成』国文学著刊行会、一九三四年/一八四二年成立) ↓ 『土左日記舟の直路』/臼田甚五郎『学生のための土左日記の鑑賞』(興文館、一九三八年) ↓ 『学生鑑賞』/小西甚一『土左日記評解』(有精堂、一九五一年) ↓ 『評解』/野中春水『土左日記新釈』(白楊社、一九五五年) ↓ 『新釈』/三谷榮一『角川文庫 土左日記』(角川書店、一九六〇年) ↓ 『角川文庫』/萩谷朴『土左日記全注釈』(角川書店、一九六七年) ↓ 『全注釈』/松村誠一『日本古典文学全集 土左日記』(小学館、一九七三年) ↓ 『旧全集』/村瀬敏夫『旺文社文庫 現代語訳対照 土左日記』(旺文社、一九八一年) ↓ 『旺文社文庫』/長谷川政春『新日本古典文学大系 土左日記』(岩波書店、一九八九年) ↓ 『新大系』/菊地靖彦『新編日本古典文学全集 土左日記』(小学館、一九九五年) ↓ 『新全集』/東原伸明『新編 土左日記』(おうふう、二〇一三年) ↓ 『おうふう』
- 6 土方洋一『日記の声域 平安朝の一人称言説』(右文書院、二〇〇七年)「私情の表出——『土左日記』論——」(二〇〇一年一月初出)。以下、土方氏の説は本書による。
- 7 秋本守英『土左日記の文章』(『国語と国文学』六十二巻十号、一九八五年十月)。
- 8 菊地靖彦『古今的世界の研究』(笠間書院、一九八〇年)第三章一「哀傷歌」(一九七二年六月初出)。以下、菊地氏の説は同論による。



- 9 越後春子『古今和歌集』卷第十六「哀傷歌」の構造と意義」(弘前大学国語国文学』十八号、一九九六年三月)。
- 10 山口昌男「土佐日記」の文芸構造―異様な旅立ち・愛娘への鎮魂―」(『活水論文集(日本文学科編)』二十六集、一九八三年三月)。
- 11 福留温子氏担当記事「郭公」の項。
- 12 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』(勉誠社、一九九一年)「付説」『土佐日記』における和歌の位相」(一九七九年初出)。以下、渡辺氏の説は同論による。
- 13 中西進「貫之の方法」(『文学』五十四卷二号、一九八六年二月)。
- 14 西山秀人「土佐日記」の和歌表現——万葉歌との関連をめぐって——」(『上田女子短期大学紀要』三十四号、二〇一一年一月)。
- 15 増田繁夫「古今集の表現——その知巧性遊戯性について——」(『国語と国文学』五十二卷九号、一九七五年九月)。
- 16 小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』(岩波書店、一九九四年)第三章第一節「貫之の歌論と詠風」(一九七九年二月初出)。

(おおば けんた・北海道江別高等学校教諭)